

野尻湖遺跡群

中村 立が鼻湖底の遺跡も含めて、野尻湖の西岸からその南側の丘陵地帯というのは、じつは遺跡密度の非常に高い地域で、旧石器時代から縄文時代草創期までの遺跡が集中しております。図5・1がそれらの遺跡の分布図で現在までに明らかにされている遺跡は39カ所もあり、これらは一括して「野尻湖遺跡群」と呼ばれます。

表5・1は、野尻湖遺跡群における各遺跡の文化段階を一覧したものです。この表に見るように、この遺跡群には、中期旧石器時代の約4.8万年前頃の立が鼻遺跡に始まって、後期旧石器時代の全期間をカバーし、縄文時代草創期に至る遺跡がほぼ途切れることなく続き揃っております。つまり最終氷期のなかでも約4.8万年前以降の人類の歩みがほぼ連続して記録されている重要な遺跡群であるわけですが、その中でも特に立が鼻遺跡は、日本列島の旧石器文化の解明には欠かせない遺跡として注目されています。

日本の旧石器文化は、約3万年前頃を境にして中期旧石器文化と後期旧石器文化に分けられますが、約4,500カ所以上ある旧石器時代の遺跡のうち、その圧倒的多数は後期旧石器時代の遺跡です。日本の旧石器文化の研究が本格的に始まるのは戦後からですが、3万年前より古い文化については、長い間、この時期の文化の存否そのものが問題になっていたという経緯がありました。前・中期旧石器の遺跡というのは、後期の遺跡とは違って1カ所での遺物の点数も多くないし、石器の加工も十分になされていませんから、出土した遺物が人工品か自然物かという点をめぐってずっと論争が続いていたわけです。

それが1976年以降、宮城県の高森遺跡や馬場壇A遺跡などの発掘調査によって、3万年前より古い地層から数層準にわたって人為の加工が明瞭によみとれる石器が出土し、だれもが前・中期旧石器文化の存在を認めるようになりました。さらに最近では、約50万年前とされている宮城県の高森遺跡や上高森遺跡

が発見され、日本列島の前期旧石器文化は原人の時代にまで遡るらしいことが分かってきたわけです。ただ何といいましても、日本の前・中期旧石器時代の遺跡の数は非常に少ないのです。

そうしたなかにあって野尻湖の立が鼻遺跡では、約4.8万年前から約3.3万年前までの地層中からナウマンゾウやヤベオツノシカなどの化石と一緒に、それらの動物を解体したとみられる骨器や石器などが出土し、その研究から、この時期の旧石器人類がナウマンゾウなどの大型獣を狩猟・解体して生活していたことが明らかになってきたわけです。

このような大型獣を解体した跡を残している遺跡は、旧石器時代では、世界的にも僅かな例しかありません。それで表に記したように立が鼻遺跡に代表される文化を特に野尻湖文化と名付けているわけです。

また野尻湖文化の時代は、旧人から新人への移行期にあたります。後でお話しするように、この移行には進化説と交代説があって、これがいま世界的に問題になっているのですが、野尻湖文化の研究は、この移行期の解明の課題とも重なっており、そうした観点からも注目されているわけです。

このように、立が鼻遺跡を含む野尻湖遺跡群は、日本の旧石器文化の中でも非常にユニークな位置を占めています。それで今日は、野尻湖文化を中心にお話しし、後期旧石器文化については要点のみを述べたいと思います。なおもう1つ付け加えますと、野尻湖遺跡群の周辺域では、1989年から信濃町教育委員会による遺跡の緊急調査が毎年おこなわれるようになり、さらに1993年～1995年には高速道路の建設に伴って、長野県埋蔵文化財センターによる遺跡の調査も始められました。これらの最近の大規模な発掘調査では、非常に大きな成果が上がっておりまして、改めてこの地域の後期旧石器文化が注目されているという状況にあります。

野尻湖遺跡群の層位と文化層

野尻湖遺跡群における層位と文化層（遺物を包含する層準）との関係は、さきの表5・1に示しました。その層序の欄には、水成の野尻湖層と風成の野尻ローム層とをつないで区分してありますが、この境はまた、中期旧石器時代の野尻湖文化と後期旧石器時代のナイフ形石器文化を区分する境界にもなっています。この点は大事なところなので少し詳しく描きますと、図5・2のようになります。

《立が鼻湖底の野尻湖文化》

図の左側は、立が鼻湖底に堆積した野尻湖層の地質柱状図と化石や遺物の産出層準を示したものです。立が鼻湖底でナウマンゾウとヤベオツノシカの化石が出てくるのは、下部野尻湖層 最下部から上部野尻湖層 までの層準ですが、石器や骨器などの遺物が出てくるのもほとんど同じように、下部 下部から上部 までの層準です。

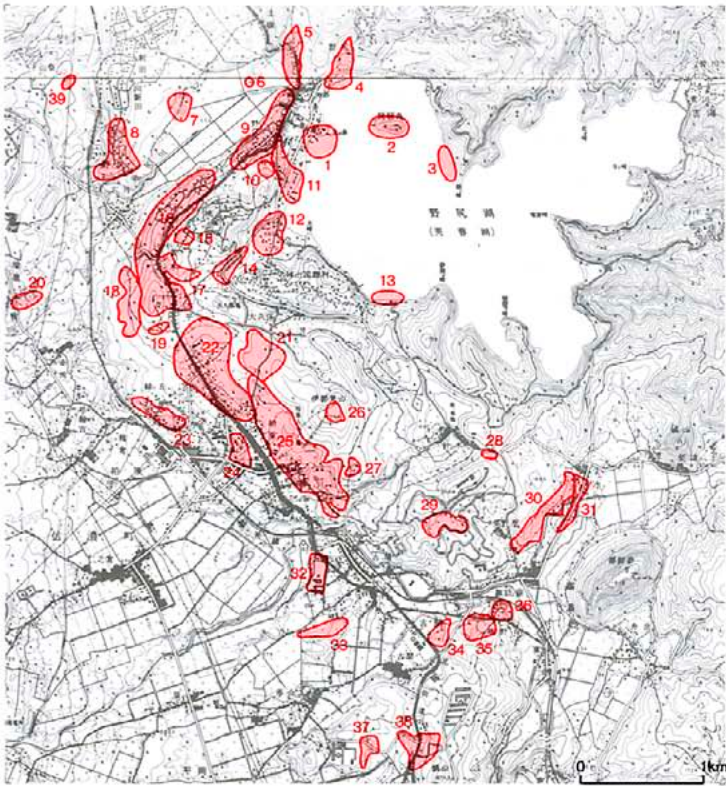
遺物が出土する下限は下部 下部になっていますが、これからの調査によっては下部 最下部からも遺物の発見される可能性はあります。上限の方は、鍵層でいいますと上部野尻湖層 の最上位に挟まれる「上 ピンク」で、これより上位の地層からは1つの遺物も発見されておりません。今後も発見されることはないと思います。このように野尻湖文化は、野尻湖層の下部 下部から上部 までの時期のもので、年代は約4.8万年前～約3.3万年前になります。

《周辺丘陵のナイフ形石器文化》

一方、立が鼻湖底に野尻湖層が堆積した時期には、周辺の丘陵では風成の野尻ローム層が堆積しています。それで、陸域での遺物の産出層準を見たのが図の右側で、ここには、中・上部野尻ローム層および柏原黒色火山灰層の柱状図と各文化層の層準が示してあります。そうしますと、鍵層の「上 ピンク」より上位の地層からは石器が出てきますが、それより下位の地層からは、つまり野尻湖文化の層準からは遺物が発見されないのです。

「上 ピンク」の上には、黒色帯とよばれる

図 5・1 - 野尻湖周辺の旧石器時代遺跡



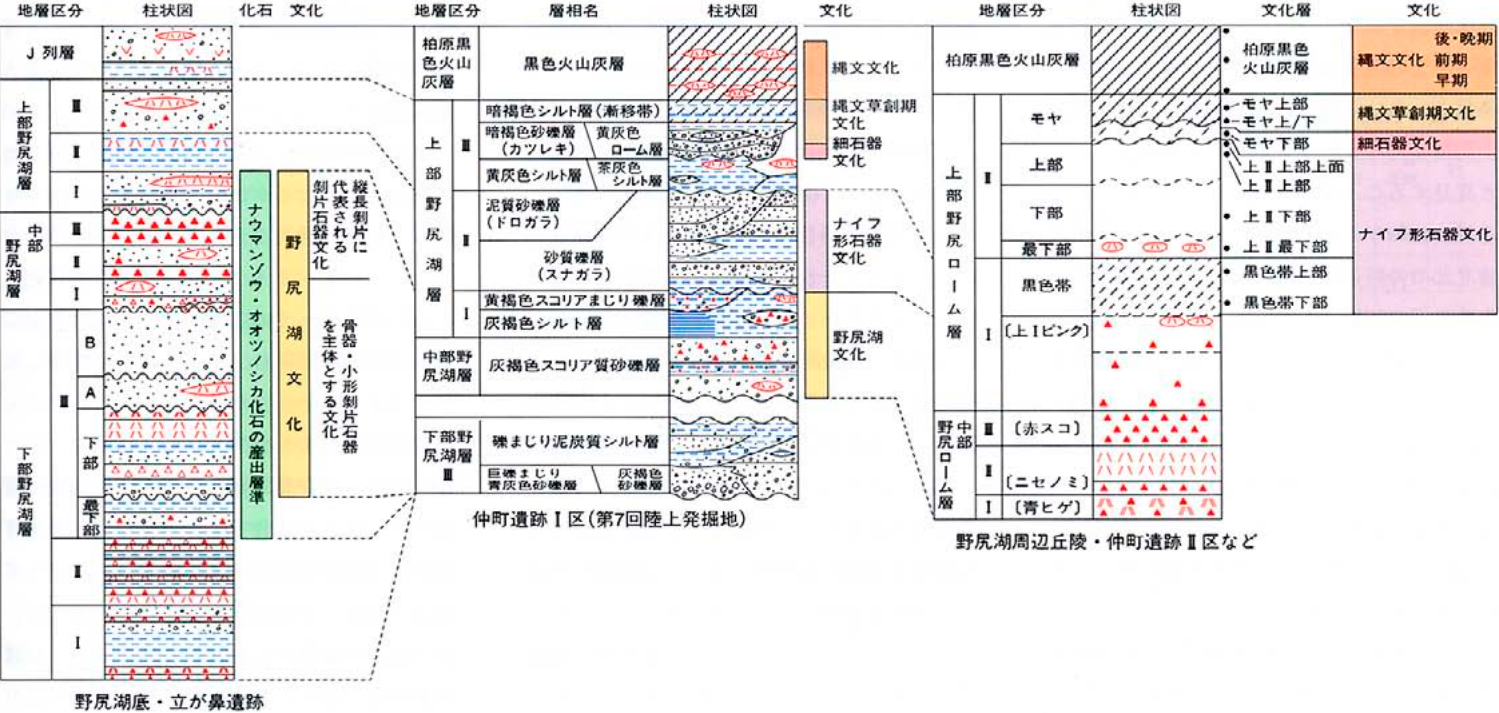
- 1 立が鼻 2 琵琶島 3 桜ヶ崎 4 杉久保 5 川久保 6 小丸山 7 向新田 8 清明台
9 仲町 10 神山北 11 海端 12 狐久保 13 砂間 14 神山A 15 神山C 16 照月台
17 貫ノ木 18 西岡A 19 西岡B 20 瑞穂A 21 大久保南 22 上ノ原 23 緑ヶ丘 24 小丸山公園
25 東裏 26 伊勢見山 27 裏の山 28 大平B 29 大平A 30 日向林B 31 セン栗 32 柳原
33 陣場 34 清水東 35 吹野原A 36 吹野原B 37 丸谷地 38 大道下 39 星光山荘

表 5・1 - 野尻湖遺跡群の文化層

層 序	文 化	年代など	県埋	遺 跡 ・ 段 階	時代
柏原黒色火山灰層	縄文早期以降		I		縄文
上 部 野 尻 ロ ム 層 I	モヤ上部	1.0	II	(爪形文) 仲町	(草創期)
	モヤ上/下			(陸線文) 仲町・狐久保・東裏	
	モヤ下部	1.3		(神子系) 海端・立が鼻・小丸山 (細石器) 上ノ原・向新田	
	上II上部上面	1.4	IV	(小形ナイフ) 仲町・杉久保AIII	後 期 旧 石 器 時 代
	上II上部	1.5		(杉久保系) (瀬戸内系) (茂呂系) 上ノ原 仲町・東裏 伊勢見山上層	
	上II下部	1.7		杉久保AI 上ノ原	
	上II最下部	2.1		照明台・貫ノ木・大久保南	
	黒色帯上部	2.7	Va	清明台・貫ノ木	中 期 旧 石 器 時 代
	黒色帯下部	3.0	Vb	仲町・貫ノ木・日向林B	
		3.3	Vc	仲町 V20?	
野 尻 湖 層	上部 I	3.9	VI	縦長剥片に代表される 剥片石器文化	中 期 旧 石 器 時 代
	中部 I~III	4.1	VII	立が鼻・仲町 I	
	下部 IIIAB	4.3		立が鼻・仲町 I	
	下部 III下部	4.5		骨器・小形 剥片石器を 主体とする 文化	
	下部 III最下部	4.8			
	下部 I・II	未発見		未発見	

年代は万年前。アカ色文字は広域テフラ
県埋は、長野県埋蔵文化財センターによる層序

図 5・2 - 立が鼻遺跡・仲町遺跡・周辺丘陵遺跡の層序と文化層の対比



古土壌があって、ここからは石器が出てきますが、この石器は、野尻湖文化のものとは違う台形状のナイフ形石器(台形様石器)で、後期旧石器文化の初期段階のもので、同じタイプのものは日本の各地から出ています。黒色帯よりさらに上位のローム層になると、後期旧石器文化を彩るいろいろなタイプのナイフ形石器がたくさん出てきます。最近の大規模な発掘調査でも、大量の石斧や石斧を磨く大きな砥石などが発見されて注目されているのですが、これらはすべて黒色帯の部分で見つかっていて、黒色帯よりも下位の地層になると遺物は何も出てきません。このように周辺丘陵の風成層の方からは、湖底で遺物が何も出てこなくなる時期になって始めて、いきなり後期旧石器文化の遺物が出てきます。それ以前の時期には、遺物が何も出ていなかったわけです。

《仲町遺跡における野尻湖文化の発見》

湖底では、ナウマンゾウの化石と一緒にそれを解体したとみられる遺物がたくさん出てくるわけですから、湖岸近くの当時の陸域や河川の周辺などにも、同じ時期の遺物が埋もれているはずですが、

それで私どもでは、仲町丘陵を中心に陸上の発掘調査を続けているのですが、家屋の建ち並ぶ陸上の発掘調査は湖底とは違った難しい条件がいろいろとあって、1991年の第6回陸上発掘までは良好な資料となる遺物をほとんど発見することができなかったのです。

それが1994年の第7回陸上発掘では、仲町丘陵北部の仲町遺跡 区から、立が鼻湖底のもの共通の特徴をもつ石器——それも、湖底のものに比べるとたいへん良好な資料を発見することができたのです。この発見は非常に大きな意味をもつもので、これにより野尻湖文化の内容には、湖底と陸域とのそれぞれ性質の異なる発掘の成果が共に反映され、同時に広域的な視点からの考察も可能になってきたからです。

図5・2の中央がその仲町遺跡 区の地質柱状図と遺物が出た層準です。図に見るように、

中部野尻湖層および上部野尻湖層 からは野尻湖文化に属する石器が出土します。そして上部野尻湖層 になると、周辺丘陵の同じ層準のローム層から出てくるナイフ形石器が出てきます。これらの遺物はすべて河成の堆積物に含まれていたものですが、いずれにしても仲町遺跡において、野尻湖文化からナイフ形石器文化に移り変わっていく時期の手掛かりが得られたわけで、この点もまた非常に大きな意味をもっています。

実をいいますと、この図を初めて発表したのは、1996年3月発行の「野尻湖博物館研究報告第4号、野尻湖の発掘7」です。それ以前は、仲町遺跡の野尻湖文化の文化層については分かっていませんから、中央の図がなく左側と右側とを直接つなぐ図しか描くことができなかったのですが、今回、本誌には、左と右の2つの文化をつなぐ要の図を載せることができたわけですが、

野尻湖文化

[1] 日本の旧石器文化と骨器

日本の旧石器時代の遺跡で骨器が出てくるのは、野尻湖以外では、後期旧石器時代の岩手県花泉町の花泉遺跡だけです。日本の場合、数千カ所もある後期旧石器時代の遺跡の殆どは陸上のオープンサイト(開地)の遺跡です。これらは火山灰層中に発見されることが多いのですが、雨の多い日本では土壌が酸性になり、動物の骨や骨器など有機質のものは溶けてしまいます。従ってこうした遺跡では、かつて旧石器人の使用した骨器や木器が存在したとしても、それら有機質の道具はすべてなくなってしまう。石灰岩洞窟中の堆積物を除けば、水成層や泥炭層中の遺跡でないと動物の骨や骨器が残りにくいわけで、花泉遺跡というのも河成段丘の泥炭質の地層中に埋もれていたものです。

縄文時代になると、貝塚など平地の遺跡でも骨角器や骨製の装身具、あるいは動物の化石などがたくさん出てくるのですが、ヨーロッパなどと違って日本では、旧石器時代の遺跡からはそうした類のものが殆ど出土しないの

が普通です。

ですから、旧石器時代の遺跡から石器しか出ないからといって、必ずしもそこに動物の骨や骨器が存在しなかったということにはならないわけです。それで最近では、失われた有機質のものを調べるために、石器に付着・残存している微量の脂肪成分を分析し、もとの動物や植物を推定するという研究も行われています。例えば宮城県馬場壇A遺跡の約13万年前頃の地層中から出土した石器からは、大・中型動物の脂肪酸が残っていたという報告もなされています。

[2] 立が鼻遺跡の概略

《動物化石と遺物の産状》

日本でナウマンゾウの化石が出てくる場所は180ヵ所以上もありますが、それらの産出状況をみまると、洞窟の中に堆積したもの以外では、沼にはまったもの、あるいは海辺に流されてきて、そこでほぼ1頭分のものが残っているという状態が多いんです。

それに対して立が鼻湖底から出る動物化石の産状の特徴は、ナウマンゾウやヤベオオツノシカのいろいろな部分の骨、いろいろな個体のものが入り交じってごちゃごちゃになって出てくること、同時に1本の骨といえども、まともな状態で出てくるものはあまりなくて、大小の骨片がばらばらになって、密集して大量に出てくることです。そして見逃すことのできないのが、こうした大量の骨片に混じって石器や骨器などが出てくることです。

こうした産出状況から、立が鼻湖底でのナウマンゾウやヤベオオツノシカは、自然に死んだものが集まっているのではなく、人類がこれらの動物を狩猟し、そこで大量に解体した跡であるらしいことが分かります。

《骨器を中心とした文化》

表5・2は、立が鼻湖底から出土した遺物を層準別に一覧したものです。下部野尻湖層 下部から上部野尻湖層 までの層準にわたって石器・骨器・木質遺物などが出ていますが、まず石器の特徴からみまると、その多くは質の良くない粗粒な安山岩で、幅広でずばり

の剥片を素材にしています。石器の大きさは1～2cmから3～4cmぐらまでで、殆どが小形の石器です。ただ中部野尻湖層 および上部野尻湖層 になりますと、幅広ですばまりの剥片から縦長の剥片を加工したものに変わっていきます。

それに対して骨器の方は、数は少ないんですが、中型から大型のものが多く、形態的にも整っています。骨器はすべてナウマンゾウの骨を加工してつくられています。骨の剥片に大・中・小といった程度の違う剥離をほどこし、何度も加工して丁寧につくられているのが特徴です。

ですから石器と骨器とを比べてみますと、骨器の方が道具としての比重が高く、野尻湖文化の主導的な道具は、骨素材のものであったことが分かります。つまり、骨器の加工には石器も使われたのですが、ナウマンゾウを解体し、その皮を剥いだり、肉を切ったりする重要な道具の多くは、骨器が中心になっていたと考えられるわけです。

石器以外の道具が中心になっている文化は世界には結構ありまして、使いやすい石材がすぐ近くにあるところは別として、そういう石材がない地域では、身近にある使いやすい材料で道具をつくっています。狩猟の対象とした動物の骨で道具をつくっている場合もありますし、南アジアの場合には、貝殻や竹を主要な道具として使っていた遺跡もあります。野尻湖の場合にも、ナウマンゾウの骨でつくった骨器を主要な道具として使っていたのだらうと思います。

《道具の製法はすべて打製》

その骨器には、すぐ後で述べるようにいろいろな器種がありますが、どの骨器でも、そのつくり方には共通した特徴がみられます。ご存じのように、日本の縄文時代の貝塚からは釣り針や銚などの骨器が出ていますが、それらの骨器は必ず磨いてつくってある磨製骨器です。ところが、野尻湖の骨器は磨いたものは1つもなくて、すべての工程が打ちかいてつくられている打製骨器です。大きな骨を打

ち割って骨の剥片をつくり、さらにそれを敲石で打って剥離し、細かい仕上げの加工をするという、そういうつくり方です。石器にも刃の部分を研いだものはありません。ですから骨器も石器も、つくり方としては非常に古い要素をもっているわけです。

ヨーロッパでは、旧石器時代は約3.3万年前頃を境にして、中期旧石器時代から後期旧石器時代へと変わりますが、その後期旧石器文化は骨器を基準にして区分されます。日本と違ってヨーロッパの遺跡には骨器が多く残されているので、いろいろなタイプの骨器がたくさん出てきます。それで、日本の縄文時代が土器を基準に区分されるように、骨器を基準に区分されているのですが、その後期旧石器文化の骨器はすべて磨製骨器です。

じつは野尻湖で骨器が出てきたとき、最初は年代が3万年前頃と見なされましたから、これをヨーロッパの後期旧石器文化の骨器と比べたわけです。そうしますと野尻湖のものは打製骨器ですから、より古い要素が認められるわけで、この違いにはさんざん頭を悩ました。それが最近、野尻湖の骨器の年代がもっと古いことが明らかになり、それがヨーロッパの中期旧石器文化に相当し、骨器の製作技法も同じレベルにあることが分かってきたわけです。

では、さきほど触れた日本の後期旧石器文化の花泉遺跡の骨器はどうかといえますと、この骨器は、骨の一端が砥石のようなもので丁寧に磨かれている尖頭器で、野尻湖のものより新しいんです。花泉遺跡からは、ハナイズミモリウシ、ナウマンゾウ、ヤベオオツノシカ、ヘラジカなどの化石が出ていますが、骨器はハナイズミモリウシの肋骨を斜めに裁断してつくられています。ただ残念なことに出土した骨器はあまり多くなく、その全体像もよく分かっておりません。この遺跡は、広域テフラAT直上の層準にありますから約2万年前という年代も確実で、後期旧石器文化に属します。

[3] 骨器

《骨製クリーヴァー(扉カラー写真)》

図5・3は、立が鼻遺跡から出土した代表的な骨器を示したものです。まず が骨製クリーヴァーで、ナタ状骨器ともいいます。長さは13.8cm、幅が6.2cmで、第10次発掘のときに中部野尻湖層 で発見されました。出土した位置は図5・7に示してあります。

図で見ると、この骨器は一番上が鋭く尖っていて、この部分に幅広の刃がつくられています。ナタとか斧に近い形です。これに柄をつけたかどうかは分かりませんが、幅広の尖った刃先を使って物を打ち割ったりする、そういう道具です。これは恐らく、ナウマンゾウを大きく解体するときに使ったものと思われる。動物を解体する場合、最初に毛皮を剥ぎ、次いで肉を切りますが、そのときに手とか足とか、まずブロックごとに分けます。そのときには関節から外しますが、そのために腱を切ったり、肉をたち割ったりする。そういうときに、こういう大型の道具がどうしても必要になるわけです。

なお現在、旧石器時代の骨器、とりわけ打製骨器の名称については、世界的に骨器独自の用語体系ができておりません。それで骨器の名称は、石器の用語体系に対応させて使っているわけですが、この骨器の形態は、石器の

表5・2 - 立が鼻遺跡出土遺物の層準別一覧

	石器	剥片 など	骨器・ 骨資料	木質 遺物	計
現湖底堆積物・ 層位不明	8	15		1	24
J 列 層	1				1
野 尻 湖 層	上部Ⅲ	1			1
	上部Ⅱ	1	1		2
	上部Ⅰ	17	19	14	50
	中部Ⅲ	19	17		36
	中部Ⅱ	10	17	8	35
	中部Ⅰ	21	29	19	70
	下部Ⅲ B	13	8	41	64
	下部Ⅲ A	3	3	2	8
	下部Ⅲ下部	8	6	6	21
	下部Ⅲ最下部		1		1
計	101	117	90	5	313

器種でいうクリーヴァー (Cleave) の形態学的規定に正確に適合していて、まさに骨製クリーヴァーというにふさわしいんです。

ところが、世界のどの遺跡を調べても骨製クリーヴァーに似たものは稀にはあっても、その名にふさわしい骨器は1つもありません。石器のクリーヴァーの方は、前期旧石器時代の半ばから中期旧石器時代の末頃にかけて、ヨーロッパ・アフリカ・アジアなどでハンドアックスなどと一緒にたくさん出ているのですが、骨製クリーヴァーは出ていません。ですから今のところは、野尻湖のものが唯一で非常に貴重な骨器ということになります。

《骨製スクレイパー(扉カラー写真)》
次に、図で としてあるのは骨製スクレイパーです。図の骨器は、長さ18.5cm、幅は6.2cmで、第8次発掘のときに下部野尻湖層 B₁ で発見されたものです。

スクレイパー (Scraper) とは、削る道具、掻く道具をいいますが、この骨製スクレイパーは皮剥ぎの道具です。断面の描いてある右側の図でいいますと、左側縁辺部が刃のついている部分です。骨でつくった刃物ですから切れ味はそれほど良くないと思いますが、動物の毛皮を手で剥がしていくときには、刃先そのものが鋭くなくても、ギザギザした刃の方が適しているわけで、そうした皮剥ぎのときに使われた道具と考えられます。

この骨器に類似した骨製サイドスクレイパーは、シベリアのベレリョフ遺跡からも出ていて、形態や二次的な刃部の加工法は野尻湖のものと似ています。ただシベリアのものは、素材がマンモスゾウであること、後期旧石器時代の末頃という点で違いがあります。

《その他の骨器》

この骨製スクレイパーが出土した層準からは の骨製ナイフが、さらにその下位の下部野尻湖層 下部からは、 の骨製尖頭器が見つかります。立が鼻遺跡から出土する骨器には、この1点の尖頭器を除くと、大型動物を狩猟するときに使ったと考えられるものは少なく、これらの道具の殆どは、細かい解体

作業のさいに使われていたように思われます。

[4] 石器

立が鼻遺跡から出土する石器は全体に小形のものが多く、陸上の遺跡とは違って湖底の広い範囲に散在して出てきます。ですから器種の検討が難しく、誰もがもどかしい思いを抱きながらも、十分な検討ができないままでした。

そうしたときに、前述のように第7回陸上発掘で、仲町遺跡 区の中野尻湖層から約3×9mの範囲に無斑晶質安山岩製の石器群がまとまって出土したのです。石器を包含する地層は河成のスコリア質砂礫層で、石器には磨滅が少ないことから、川の流れの影響をあまり受けずに埋没したと考えられます。

こうした同一石材の資料が多く集中している石器群は、立が鼻湖底では全く見られなかったもので、野尻湖文化の石器のなかでは、最もまとまった一括性のある石器と見做すことができます。したがって、これらの石器を基準にすることより、立が鼻遺跡の石器を再検討することが可能になりました。

図5・4の左側に示した の3器種が、仲町遺跡から出土した主要な石器です。右側の石器は立が鼻遺跡から出土した石器で、左側の石器と同一器種のを配列してあります。《基部加工剥片》

は、基部加工剥片です。分厚い縦長剥片を素材とし、先端が尖った長三角形の石器で、ナイフ状石器とも呼ばれています。打面側の側縁の表面・裏面の両側にわずかに平坦な剥離を加え、さらに基部に剥離を施しているのが特徴です。

右側の は立が鼻遺跡の基部加工剥片です。従来はいずれも石刃とされていましたが、精しく観察すると と同様の特徴がみられ、今回再検討の結果、修正したものです。 は中部、 は上部 から出土しています。

《へら形石器》

は、厚手の縦長剥片を素材としたへら形石器です。側縁に急角度の刃潰しを施し、刃部は末端の自然縁を利用しています。全体の器

形に特徴があります。

右側の は立が鼻遺跡の下部 出土のへら形石器です。従来はスクレイパーとされていたものですが、 と同様の特徴をもつので今回修正しました。全体の器形もばち形で、へら形石器とされます。

《スクレイパー》

は、分厚い幅広の剥片を素材にしたスクレイパーです。表面下端に浅く不規則な剥離を施し、刃部をつくっています。

右側の は、立が鼻遺跡のスクレイパーで、 とほぼ同様の方法でつくられています。これらはいずれも、従来からスクレイパーとされていたもので、 は中部 から出土したもので よく似ています、 と は中部、 は中部 から出土したものです。

以上の3つの器種は、たんに野尻湖文化を特徴づける石器というだけでなく、野尻湖文化とほかの地域との関連を明らかにし、さらには中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行期の文化を考える際の重要な資料となるものです。

[5] 木質遺物

立が鼻遺跡からは、旧石器時代の遺物としては、滅多に出土しそうな木質遺物が3点出ています。その1つは、第8次発掘のさい中部野尻湖層 から発見された「ヤリ状」の木質遺物です。素材はトウヒ属の枝で、長さ64.5cm、長径5.0cm、先端部が尖り、基部には打った痕があります。

そのほか、下部野尻湖層 下部からは長さ41cm、径5.4cm、上半分のほぼ中央部には打製の加工具の痕が認められる木質遺物が出ています。また下部 Bからは長さ61cm、径4.3cmの針葉樹の木質遺物が出ています。この遺物には、自然の状態でできたとは考えにくい多くの変形面がみられ、加工面の可能性があります。

[6] スパイラル剥片

野尻湖から出る遺物は、動物を狩猟するときに使ったと思われる道具類は少なく、動物を解体するときに使うものが多く出てくるので

図 5・3 - 野尻湖文化の骨器

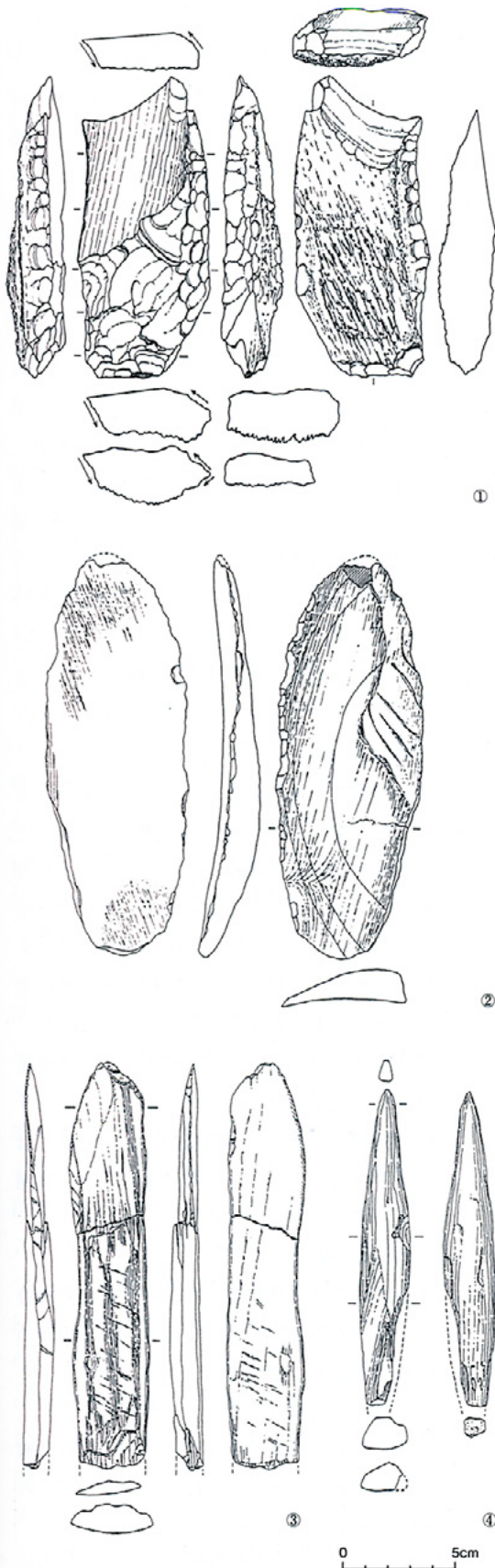
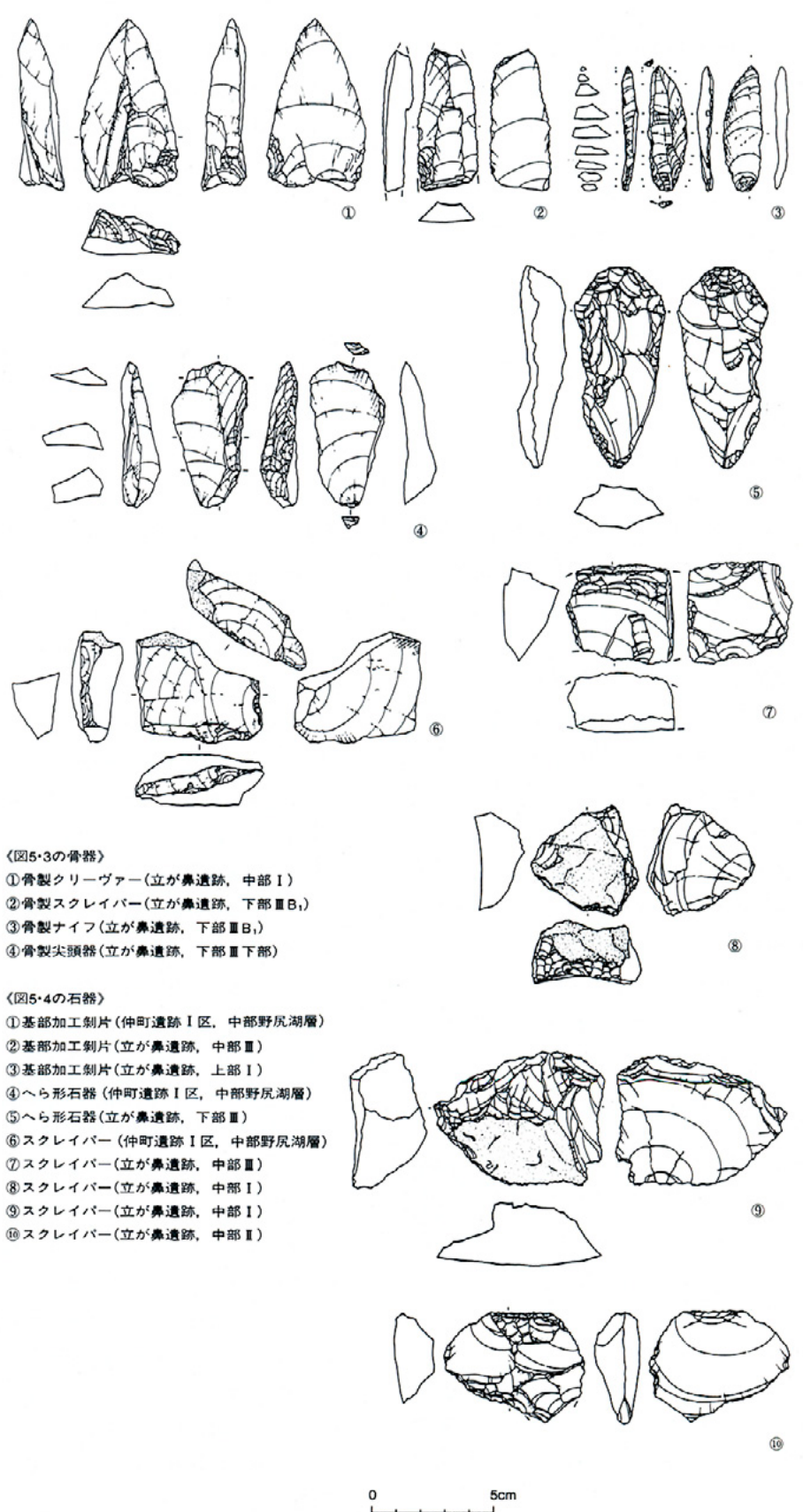


図 5・4 - 野尻湖文化の石器



〈図5・3の骨器〉

- ①骨製クリーヴァー(立が鼻遺跡, 中部Ⅰ)
- ②骨製スクレイパー(立が鼻遺跡, 下部ⅢB₁)
- ③骨製ナイフ(立が鼻遺跡, 下部ⅢB₁)
- ④骨製尖頭器(立が鼻遺跡, 下部Ⅲ下部)

〈図5・4の石器〉

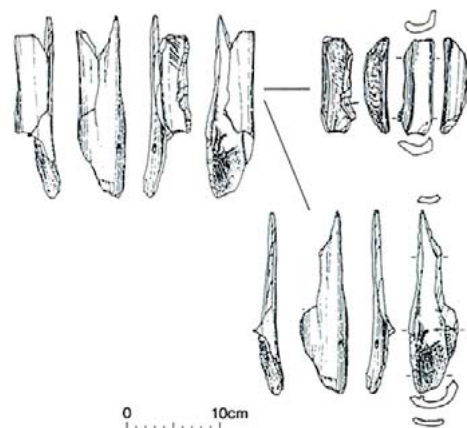
- ①基部加工剥片(仲町遺跡Ⅰ区, 中部野尻湖層)
- ②基部加工剥片(立が鼻遺跡, 中部Ⅲ)
- ③基部加工剥片(立が鼻遺跡, 上部Ⅰ)
- ④へら形石器(仲町遺跡Ⅰ区, 中部野尻湖層)
- ⑤へら形石器(立が鼻遺跡, 下部Ⅲ)
- ⑥スクレイパー(仲町遺跡Ⅰ区, 中部野尻湖層)
- ⑦スクレイパー(立が鼻遺跡, 中部Ⅲ)
- ⑧スクレイパー(立が鼻遺跡, 中部Ⅰ)
- ⑨スクレイパー(立が鼻遺跡, 中部Ⅰ)
- ⑩スクレイパー(立が鼻遺跡, 中部Ⅱ)

すが、さらに野尻湖では、実際に人間によって解体された骨の証拠が出てきます。骨というのは、腐って劣化した状態で割れるときと新鮮な状態で割れるときとでは、割れ方が違います。それで私どもでは、ゾウやオオツノシカの骨は手に入りませんから、オオツノシカに近い大きさのウシの骨を使って実際に骨がどのような割れ方をするかを調べました。大きな石で叩いて割るという、骨の剥離実験を繰り返したわけですが、そうしますと、それと同じパターンの割れ方をした骨片が湖底から出てきたんです。

図5・5に示したものがその1例で、これは上部野尻湖層 層から出たオオツノシカの骨です。こういう人為的に割った骨をスパイラル剥片といいます。管状の骨を上から礫で叩いて割りますと、その叩いたところから割れ目がスパイラル状に、螺旋状に広がります。それがまた下で1点に結ばれるので、割れた剥片は横長のねじれた菱形になります。そういうシャープな割れ方をしますから、出土した骨を見てスパイラル剥片かどうかを判定できるわけです。

さらに、割られた骨どうしが図のようにつついて、もとの骨の状態を復元できます。これを接合といいます。これにより新鮮な状態の骨が、人間の手によって打ち割られたことがはっきりと証明できるわけです。このオオツノシカの骨の接合資料は、約10mほど離れた地点から出てきました。

図 5・5 - スパイラル剥片とその接合



動物の骨を割ってなかの骨髓を抽出し、それを食料にしたり、あるいは燃料として使うことは、すでに原人の時代から行われています。また日本の縄文時代にも骨を割って骨髓まで食べていたことが知られています。野尻湖でも、骨髓抽出のためにナウマンゾウやオオツノシカの骨が割られていたわけです。

[7] ナウマンゾウの解体

さきほど間島さんから、中部野尻湖層 層ではナウマンゾウの肋骨23本がまとまって産出し、これが1個体のものであろうとお話がありました。その肋骨群を産出したと同じ場所からは、遺物の方では、ナウマンゾウの骨でつくられた骨器・剥片などが、およそ5m四方の小さな範囲に、約15点もまとまって出てきます。さきに触れた骨製クリーヴァーが出てくるのもこの場所で、立が鼻遺跡のなかにあっても、ナウマンゾウと野尻湖人との関係が最もよく保存されている特別なところなんです。図5・7が、それらの骨や遺物の分布図で、肋骨の分布は図4・10と同じです。

まず、さきに間島さんが触れられたナウマンゾウの右第9肋骨と、それに接合するスパイラル剥片は、図の13と12の位置から出ています。2つを直線で結んでいるのは、両者が接合することをあらわします。その接合関係は図5・6のDに示すとおりで、がナウマンゾウの右第9肋骨、がスパイラル剥片で、両者は のように接合します。

つまりここでは、ナウマンゾウ1個体の肋骨の骨が散乱しているその中に、その肋骨の1本と接合するスパイラル剥片が出ています。これは、ナウマンゾウの骨がまだ新鮮な状態のときに、人間によって打ち割られたこと、1個体のナウマンゾウが、この場所（または近辺）で、人間によって解体されたということです。そしてこのすぐ傍らには、骨製クリーヴァー（なた状骨器）が出ています。このスパイラル剥片は、ナウマンゾウの解体作業中に、肋骨を叩いて割ってはずし、なかの内蔵を取り出す作業のさいに生じたのだらうと思います。

[8] 骨器製作所

その同じ場所からは、約15点の骨器・剥片などの骨資料が出土します。これらの骨資料については、従来は、いま述べた1例2点の接合資料以外には、約13点の骨資料のうち1例2点の接合が知られておりました。ところが最近の研究で、この13点の骨資料のうち3例8点（従って全体では15点のうち10点）が接合することが明らかになったのです。

しかも、それらの接合資料を精しく検討すると、この場所で骨器が製作されたこと、その技術が予想以上に高いというだけでなく、諸々の工程がすべて骨器の製作を目標に進められている様相が明らかになってきました。従来の知見は一新され、ナウマンゾウ解体の場は、同時に骨器製作所であることが判明したのです。図5・6にA、B、Cとして示したものが、これら3例8点の接合資料です。それぞれの資料が出土した位置は、図5・7に示してあります。以下、Aから順に述べます。

《接合資料A》

は骨製基部加工剥片で、ナイフ状骨器とも呼ばれます。は二次加工のある骨製剥片で、二次加工の痕跡が認められる完成まぎわの骨器です。両者は のように接合します。つまり、を2つに分割して と の骨器をつくっているのですが、 の方は完成寸前の状態で残されたわけです。

この接合資料の場合、は中央部でほぼ直角に近い剥離で2分されているのですが、こうした剥離の方法は、骨器製作の技術としては今まで知られていないもので、今後の研究課題になっています。

《接合資料B》

の3つの骨製剥片が、の骨核に接合します。その接合によって復元された板状の骨核が です。骨核というのは、骨器をつくるための骨の母材と考えていただくとよく、この場合には、の骨核に対して、打点を横に移動させながら、次々に連続的に の3つの剥片をつくっています。

こうしてつくられた骨製剥片は、二次的な加

工をしないで使う場合もありますが、普通はこれに手を加えてよりシャープな骨器に仕上げます。その意味では、今後、数cmほどの小さな骨器が発見される可能性もあります。いずれにしても、ここでは1つの骨核から能率よく、複数の骨器をつくる技術がすでに獲得されていることが分かります。

じつは、前述の従来から知られていた1例2点の接合資料というのが、この資料で、従来は、を加工途中の骨製剥片、をチップ(打ちかき屑)とみなしていた、これに疑問をもつ人は殆どいなかったのです。それが今回、チップと見做していたものこそが、じつは骨製剥片であったことが分かったわけです。

接合資料というのは、復元した結果からみるとえらく簡単なんです。が、元の資料から接合資料を探し出すのは非常に難しく、古いものでは20年以上も見過ごされていた例もあるんです。今回、この素晴らしい発見をしてくれたのは大阪市文化財協会の趙哲済さんです。この発見がきっかけとなって、骨に対する打撃の方向が従来考えていたものとは違うことが分かりました。こうして、野尻湖底の遺物に新たな光があてられ、日本で初めての骨器製作址が浮かび上がってきたわけです。

《接合資料C》

のスパイラル剥片から、の骨製剥片を剥離したもので、が復元されたスパイラル剥片です。スパイラル剥片は、一般的には骨髄を抽出するためのものとされるのですが、野尻湖の場合には、スパイラル剥離は単に骨髄を抽出するためだけでなく、骨器製作の初期段階に組み込まれていたことが分かりました。この点もまた、従来の知見にはなかったことで、新しく確認されたことの1つです。

以上の3つの接合資料からは、C→B→Aの順序は骨器製作の工程に合致しており、ここでは意識的に骨器の製作が行われていたことが分かります。そして約5m四方のごく狭い範囲に密集し出てきた15点の骨資料のうち10点までが接合しますから、これらの遺物が水流などによって大きく動かされることがなかつ

図 5・6 - 中部野尻湖層 の骨器接合資料

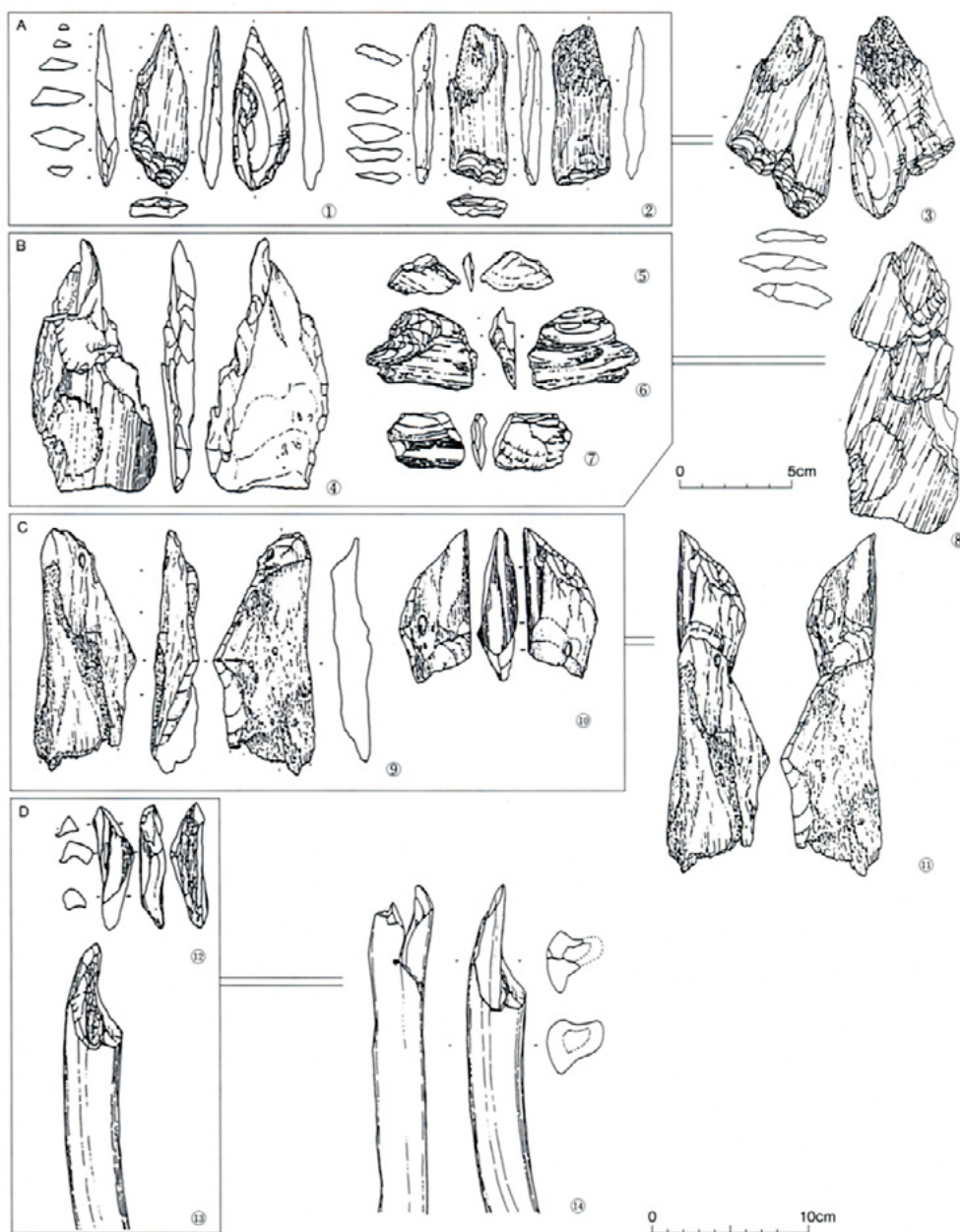


図 5・7 - グリッド C 9 周辺の肋骨群と接合資料

